
もう一度会えたら・・・

加斗彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一度会えたら・・・

【Zコード】

Z3875A

【作者名】

加斗彰

【あらすじ】

キャバクラで働く「あんず」の恋愛小説。ただ「あんず」は、生死をさまよう心の揺れも経験したことがある。そのため、人を好きになつても、なかなか距離を縮めることができず、うまくいかないでいる。そんな時に出会ったのが、一回りも年上の「あき」だった。

<第1話>

私は新宿東口でひとりでウインドショッピングをしていた。アルタや丸井、高島屋などを見ては、街角の小さなショッピング等も見て、楽しんでいた。

すると、「さくらや」の近くでいきなり男が声をかけてきた。

「ねえ、ねえ。君、かわいいね」

馴れ馴れしいので、無視をしていたが、

「どこの店で働いているの？」

と続ける。古めかしい野球帽をかぶり、サングラスをかけて、肌が不自然に日焼けしていた。

服装はラフな格好で、ジーパンに白のポロシャツだった。ナンパかと思って、無視しようと思っていると、その男は、何かをわざと落した。思わず目が行ってしまったが、それはピンクのハンカチだった。

「あ、あれ、ハンカチがどこか。。。。」

わざとらしい演技だったが、そのパフォーマンスがキモ可愛い感じだった。

思わず笑ってしまった。

「あ、笑ったな。じゃあ、僕の話を聞いてもらおうかな。そうじやないと、かつこわるくて、この街を歩けないよ。僕は一生、笑い者だ」

と言つてシュンとしていた。

私はそのシュンとした姿を本気とは思わなかつたが、可愛く見えた。

私よりは確實に年上だつ。おそらく一回りくらいがうはずだ。でも、そのだけに可愛い感じが、親近感を与えくれた。

「じゃあ、話を聞くへりこなら

そう私は答えた。

「僕、いろいろのものです」

差し出した名刺には、「伊藤さとし」とあった。
会社名は「ハートフルライフ」。

わざとらしい名前だった。

おそらく、流れからいつて、どこかのキャバクラか、風俗店のスカウトマンだろうな、って思った。

「ちよつとだけお茶しない？」

話を聞くと言った手前、断れなかつた。

「まあ、お茶くらいなら

「君、名前は？」

軽いノリで聞いてきた。

「あ、私ですか？」

「そうだよ、他の誰に聞いてるんだよ」

「そうですよね。私は、あんずです」

「あんずかあ。変わった名前だよね。」

「え、まあ」

実は、私はすでにキャバクラで働いている。

「あんず」はその源氏名として使っている。

理由は単純で、「あんず酒」が好きだったからだ。

そこから徒歩で3分ほどのビルの3階にある喫茶店に入つて行つた。

喫茶店内は、若者はほとんどいなく、なにやら商談めいた会話が飛び交つていた。

「紹介します。友人の、小岩井です」

席に座つていたのは、スーツを着こなした紳士な感じの男性だった。名刺を差し出された。そこには「株式会社 ライブアイ コーポレーション」とあり、「営業部長」という肩書きだった。

「では、よろしく」

といって、さきほどの男、伊藤は立ち去つて行つた。
なにか騙されたんじゃないか?と不安がついていると、

「いや、「ごめんね。実はさ、街頭でのスカウト行為は禁止になつたんだよね。それで、こうして間接的にやつているわけ」

そういえば、迷惑防止条例が改正されて、街頭でキャバクラや風俗へのスカウト行為が禁止になった、というニュースがあつたつけ。だから、こうして、最初にナンパして、その人ではないひとがスカ

ウトをするのか。

手の込んだことをしているなあ、と思った。

「君、キャバクラで働くかない？」

やはり、思った通り、キャバクラのスカウトだった。

「実はもう働いているんです」

「え、そうなの？ちなみに、どこで？」

「中野です」

「中野かあ。時給は、ぶっちゃけどれくらいなの？」

「1500円です」

「安いね。もし、僕の紹介するところだったら、最低2500円は保証するよ」

時給の1000円upは正直、うれしい話だ。

でも、私たって入店間近なころは時給2000円だったが、客がそれほど呼べなかつたために、時給が下がつた結果だつた。だから、最低2500円といつても、どうせ下がつてしまふんだろうな、つて思つた。

それに、お金だけが働く目的ではないし・・・。

小岩井は、スカウト先のキャバクラの店紹介を始めた。

「小箱なんだよね。せいぜい、客は15人くらいしか入らないんだよ。でね、いまの店のコンセプトが、ドレス系なんだけどね、ちよつと異色な人を入れようと思っている訳よ」

私がいま勤めている店もドレス系だが、ほとんどが女子大生というアルバイト感覚な人が多い。そのため、店の女の子も楽しめるようになると、コスプレデーが月に4回もある。人によつては、そのコスプレデーしか出勤しない子もいるくらいだ。

ちなみに、私もコスプレは大好き。かといって、コスプレ喫茶では働きたくない。といつても、以前は、秋葉原のコスプレ喫茶では働いた経験がある。でも、あのときは、客のひとりにストーカーされて、迷惑をした経験があつた。

小岩井は説明を続けた。

「異色な人というのはね、ドレスで出せる大人びた雰囲気つてあるでしょ。それとは真逆な感じ。そう、妹系な感じというか、今でも言えば、萌え、つていうの？最近のお客さんの中には、その萌えが好きな人がいてね。かといって、店全体を変えてしまうほどの人數がいるわけでもないし、女の子もそれほどしたがらない。それにね、店全体を変えてしまうと、これまでの客層は間違いなく逃げると思つてるわけ」

たしかに、私は「妹系」とも、「萌え系」とも呼ばれたことがあるし、そう呼ばれることがうれしい。しかも自覚がある。だからこそ、コスプレ喫茶でも働いていたわけだし。

「少し考えさせてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875a/>

もう一度会えたら・・・

2010年12月14日20時26分発行